

「近代の書簡を読む」 解説

1 諸井(三)家文書について

- ・総点数 8980 点の文書群。
- ・諸井(三)家は、中山道本庄宿仲町の商家。位置関係から「東諸井家」と呼ばれた。

※近世の本庄には諸井家が三家あった。他は南諸井家、北諸井家。

- ・江戸時代、東諸井家の歴代当主は幕府から野廻鳥見役(のまわりとりみやく)を拝命。江戸時代後期から絹・太織(ふとおりの)商、幕末には糸繭・蚕種商としても活躍。明治5年(1872)に創業した官営富岡製糸場の原料の買い付けも請け負った。

明治時代以降は実業界でも活躍するようになる。

- ・十代目諸井泉衛(せんえい)は、駅逡頭(えきていのかみ) 前島密(ひそか)の依頼により、明治5年(1872)自宅に本庄郵便取扱所を開設した。のちには本庄郵便局初代局長になり、局長職は子孫に代々受け継がれて昭和30年代(1955～1964)まで続いていた。東諸井家は「郵便諸井」とも呼ばれた。

- ・十一代目諸井恒平(つねへい)は、日本煉瓦製造会社、秩父セメント社長、秩父鉄道、西武鉄道取締役等と郵便局長を兼務していた。

- ・資料の中心は近代文書で、幕末から近代にかけての繭・生糸取引関係資料、郵便局関連資料、財界人との交流を示す書状、典籍類などである。

- ・諸井(三)家の資料は、当館の他、渋沢史料館、郵政博物館、埼玉県立歴史と民俗の博物館にも収蔵されている。

2 資料を読む前に

(1) 書状(書簡)について

- ・書状(書簡)とは手紙のことであって、用件・意志・感情などを書き記して相手方に伝える私的な文書のことである。書簡・書翰・書札(しょさつ)・尺牘(せきとく)・消息(しょうそく・しょうそこ)・消息文などと呼ばれる。これらのうち漢文体のものを尺牘といい、仮名書きのものを消息ということが多い。

- ・古代のわが国では書札の書式は固定せず多様なものがあつたが、平安時代の中期以降になると、初行から本文、本文が終るとその次行に日付、日付の下に差出書、日付の左上部に充所を書き、最後に封を加えるという書式が一般化する。書体・文体も整備され、文体は純漢文体から「侍」「給」などの言葉を交えた和風漢文体となり、平安時代の末期ころまでには、「候」を用いた文体が成立、また書止め文言も「恐々謹言」などに規格化され、日本的

な書札が完成する。

※書札礼(しょさつれい)：書状(書簡)を出す際のルール。中世に整う。

・戦国時代になると、各地の戦国大名はほとんど書状形式の文書で領国支配を行うようになる。

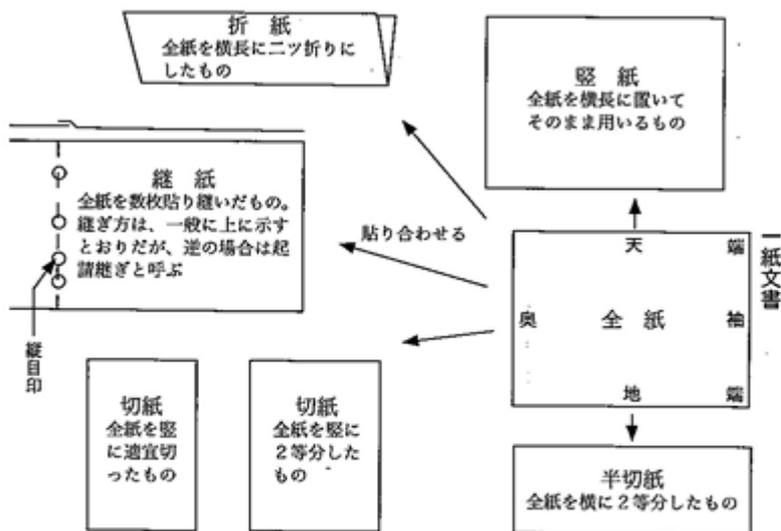
・戦国大名の文書だけではなく、広く書状形式の文書の公私の区別は簡単にはつけ難い。

(2) 近代の書簡(手紙)の形式

・古くは書簡は全紙二枚に書いていたが、江戸時代になると半切紙や巻紙(まきがみ)に書くようになり、明治・大正時代にも続いた。

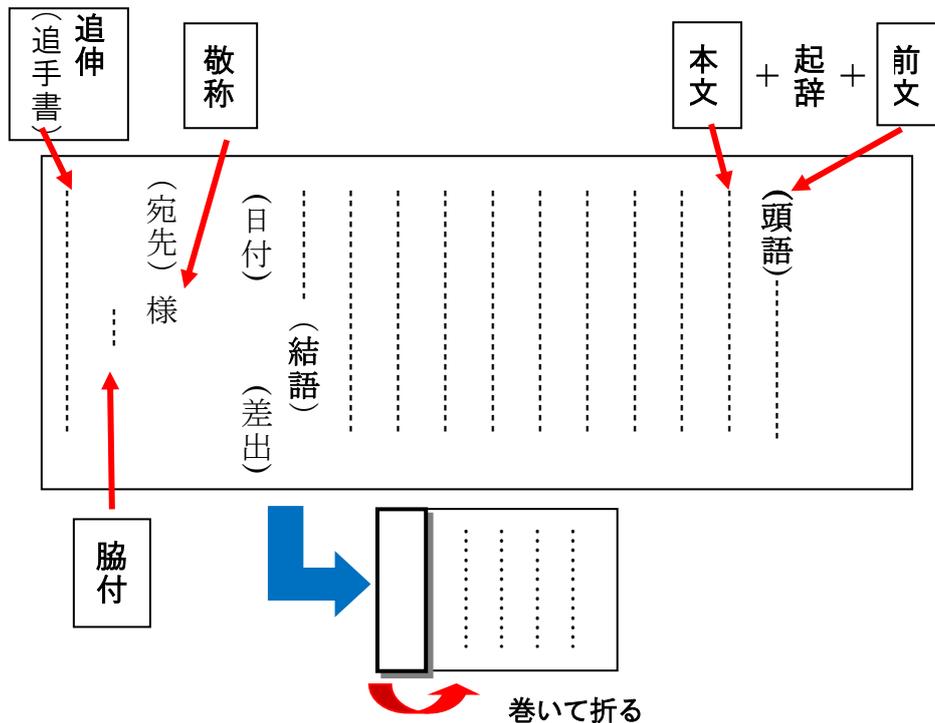
※巻紙(まきがみ)：全紙や折紙を折り目で切った半切紙(はんせつし)をつなげたものが継紙(つぎがみ)、さらにそれを巻いたものが巻紙。

【紙の使い方】



若尾俊平『図録・古文書入門事典』(柏書房、1991年)から転載

【書簡の形式例】



頭語（発語）

拝啓 啓上 拝復 謹啓 前略 …等

結語

敬具 拝具 頓首 恐々謹言 匆々 匆々頓首 不宣 …等

宛名敬称

様 殿 尊台 大兄 賢台 閣下 …等

脇付（わきづけ）

案下 机下 貴下 梧下 膝下 …等

追伸（追而書《おつてがき》）

追而 再伸 尚々 二白 …等

3 語句の解説

- ・ 然者（しかれば）：（手紙の文などで）そこで。さて
- ・ 賢台（けんたい）：手紙などで、同輩あるいは目上の相手を敬って言う語。
- ・ 悲傷（ひしょう）：かなしみいたむこと。かなしくいたましいこと。悲愴。
- ・ 八基村（やつもとむら）：明治 22 年(1889) に成立した榛沢(はんざわ)郡手計村が翌 23 年に改称した村名。現在の深谷市。
- ・ 客年（かくねん）：去年。昨年。
- ・ 摂養（せつよう）：からだに気をつけること。摂生。養生。
- ・ 昨夢（さくむ）：昨日の夢。

- ・頃日（けいじつ）：このごろ。しばらく。
- ・伝声（でんせい）：伝言すること。また、その伝言。ことづけ。
- ・梧下（ごか）：（梧桐造りの机のそばの意）手紙の宛名の脇付に用いる語。机下。梧右。おそば。おてもと。

○榛沢郡八基村について

- ・明治 22 年(1889) 上手計(かみてばか)村、下手計村、大塚村、血洗島(ちあらいじま)村、横瀬村、町田村、南阿賀野(みなみあがの)村、北阿賀野村の八箇村が合併し手計村が成立。
- 翌 23 年に手計村が八基村と改称。
- ・明治 29 年(1896) 榛沢郡が大里郡、幡羅(はたら)郡、男衾(おぶすま)郡と統合し大里郡となる。
- ・昭和 29 年(1954) 新会村と合併し豊里村となる。

4 古文書の内容要約

少し前から病氣療養中だった御老母が逝去されたと聞き驚いています。あなた様や御兄弟の悲しみをお察しいたします。昨年、八基村でお互いの老後について話し合ったことは昨日の夢となり感慨深いことです。私も是非御会葬申し上げたいところですが、先日から風邪気味のため不本意ながら代理人にてお見舞い申し上げます。御親戚御一同へもよろしくお伝えください。取り敢えず御追悼を申し上げます。

5 渋沢栄一と東諸井家

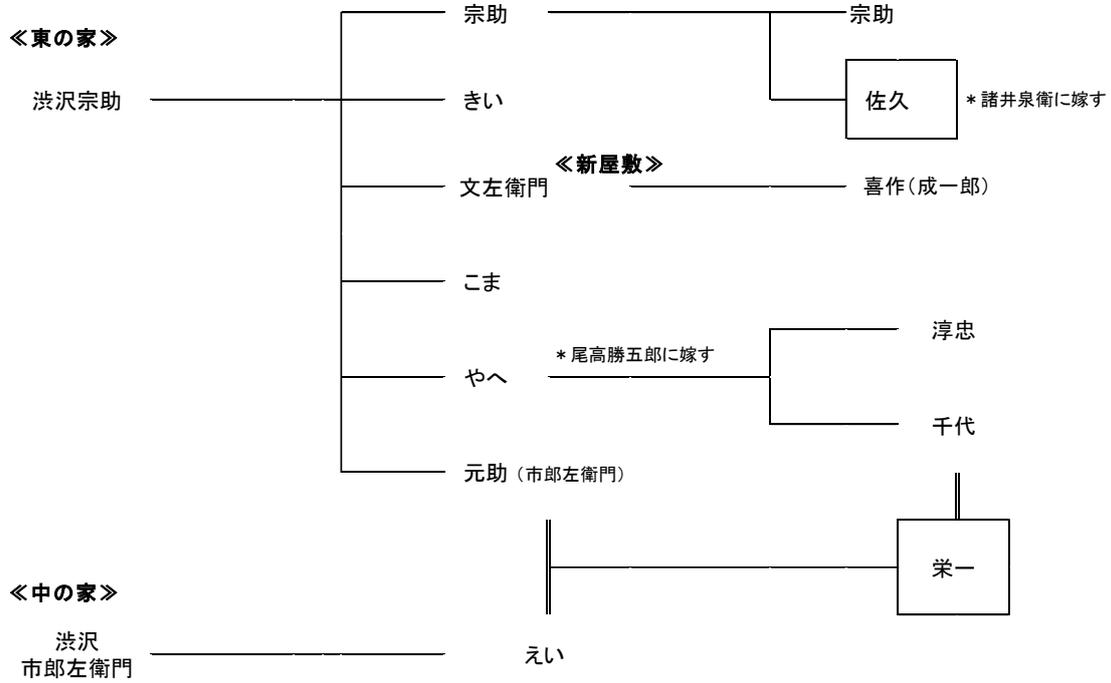
○渋沢栄一 天保 11 年(1840)—昭和 6 年(1931)

- ・武蔵国榛沢郡血洗島村出身。
- ・家業を通じて商売を学び、幕末には徳川慶喜に仕え幕臣となる。パリ万博に出席する慶喜の弟昭武に随行して渡仏。ヨーロッパ文明に接する。
- ・帰国後、明治政府に仕え、のち民間の実業家として産業、教育、福祉、民間外交等の多方面で活躍した。
- ・生涯に約 500 の企業の育成に係わる。その中には、日本煉瓦製造会社、秩父セメント、秩父鉄道等がある。

○諸井家の人々

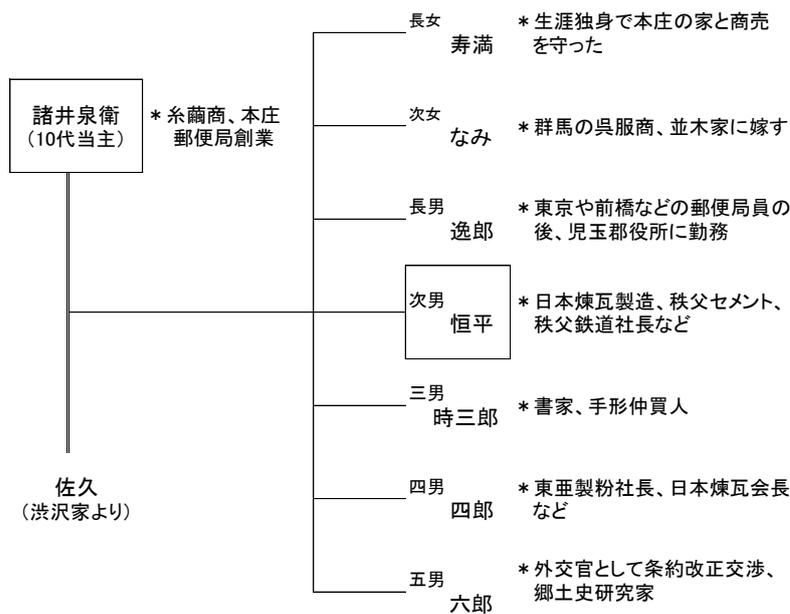
- ・諸井恒平（泉衛次男）：11 代目当主、渋沢栄一の引き立てにより、日本煉瓦、秩父セメント社長ほか、鉄道会社取締役など実業界の重鎮となる。
- ・諸井恒平母＝佐久（泉衛妻）：榛沢郡血洗島村三代目渋沢宗助（通称「東の家（ひがしんち）」）の次女。渋沢栄一とは従姉妹の関係。栄一の父と宗助が兄弟。

【渋沢家略系図】 ※「渋沢家本支系図」（日本煉瓦製造株式会社文書No.50）から作成。家族の配列は順不同



【諸井家略系図】 ※「新公開 諸井(三)家文書」展（埼玉県立文書館 平成26年6月）展示パネルより

諸井泉衛・恒平と子どもたち * 配偶者は除く・敬称略



【参考】

写真1 「郵便役所開設指令書」(諸井(三)家文書 No.303)

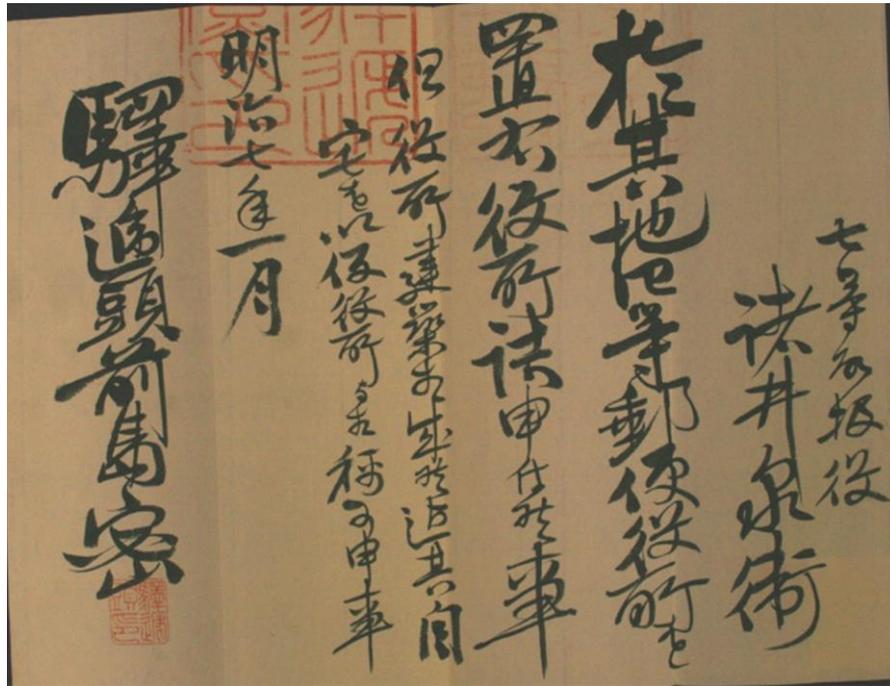
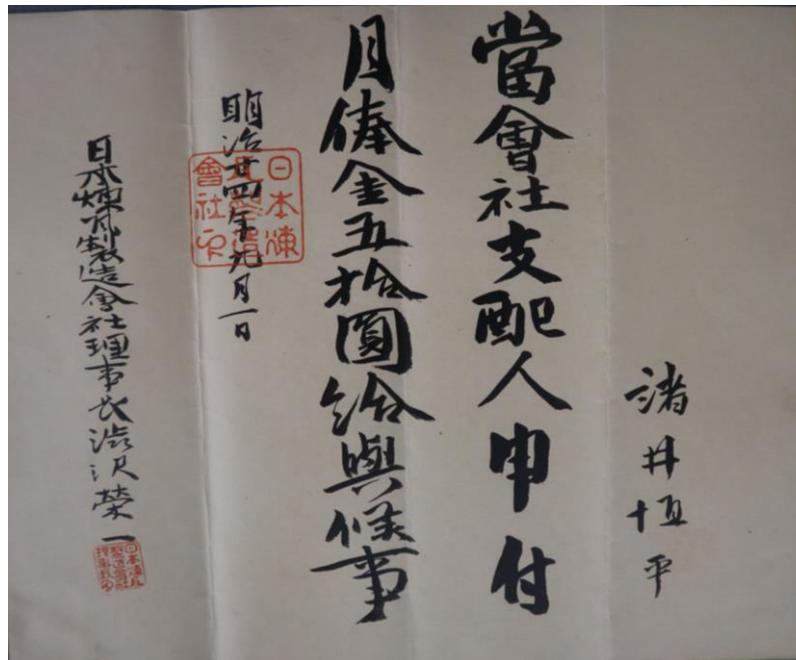


写真2 [日本煉瓦製造株式会社支配人辞令] (諸井 (三) 家文書 No.3722)



○参考文献

- 『国史大辞典』(吉川弘文館、1979~1997年)
- 『日本国語大辞典(第二版)』(小学館、2002~02年)
- 林英夫監修『解説近世書状大鑑』(柏書房、2001年)
- 『諸井(三)家文書目録』(埼玉県立文書館、2014年)
- 『新公開 諸井(三)家文書』展示リーフレット(埼玉県立文書館、2014年)
- 『企画展 埼玉の黎明』展示解説図録(埼玉県立文書館、2021年)